

## 目次

はじめに	(viii)
謝辞	(ix)
略号一覧	(xi)
地図と表の一覧	(xii)
第1章 序論	1
1 スンバワ語が話されている地域	1
2 スンバワ語の方言	2
3 スンバワ語をめぐる多言語状況	4
3.1 国語インドネシア語とスンバワ語	4
3.2 スンバワ県における他言語話者	5
4 先行研究	6
5 本研究の背景（データ）	7
第2章 音韻の概略	9
1 音素	9
1.1 子音	9
1.2 半母音	10
1.3 母音	11
2 音節	12
2.1 音節の構造	12
2.2 形態素内、単語内の音節の分布	13
3 単語の強勢	18
3.1 強勢が消える場合（二つ以上の単語が構成する強勢の単位）	18
3.2 特に強い強勢を持つ単語	20
第3章 文法の概略	29
1 文の成分と構成要素	29
1.1 述部	29
1.2 述部以外の成分	30
1.3 文の構成要素の分布	31
2 文の構成要素（名詞句、副詞句、前置詞句）	31
2.1 名詞句の構造	31

2.2	副詞句	33
2.3	前置詞句	34
3	文のタイプ	34
3.1	動詞句以外が述部の主要部である文	34
3.2	動詞が述部の主要部である文	35
3.2.1	述部の構成要素	35
3.2.2	述部と共起する要素	36
第4章	形態論	39
1	単語と形態素	39
1.1	語根	40
1.2	接辞	41
1.3	語根でも接辞でもない要素	42
2	語形成	44
2.1	接辞の付接	44
2.1.1	他動詞を派生する接頭辞 <i>sa-</i>	46
2.1.1.1	接頭辞 <i>sa-</i> の形態	46
2.1.1.2	接頭辞 <i>sa-</i> の機能	47
2.1.2	自動詞を派生する鼻音接頭辞 <i>N-</i>	54
2.1.2.1	鼻音接頭辞の形態	54
2.1.2.2	鼻音接頭辞の機能	55
2.1.2.3	鼻音接頭辞のまとめ	60
2.1.3	自動詞を派生する接頭辞 <i>bar-</i>	61
2.1.3.1	接頭辞 <i>bar-</i> の形態	61
2.1.3.2	接頭辞 <i>bar-</i> の機能	63
2.1.3.3	接頭辞 <i>bar-</i> のまとめ	67
2.1.4	自動詞を派生する接頭辞 <i>ka-/geN<sup>2</sup>-</i>	68
2.1.4.1	接頭辞 <i>ka-/geN<sup>2</sup>-</i> の形態	68
2.1.4.2	接頭辞 <i>ka-/geN<sup>2</sup>-</i> の機能	71
2.1.4.3	接頭辞 <i>ka-/geN<sup>2</sup>-</i> のまとめ	74
2.1.5	語頭に <i>ka-</i> を含む自動詞	75
2.1.6	名詞を派生する接頭辞 <i>ka<sup>-1</sup></i>	76
2.1.7	名詞を派生する接頭辞 <i>ka<sup>-2</sup></i>	76
2.1.8	名詞を派生する接頭辞 <i>paN-</i>	77
2.1.8.1	接頭辞 <i>paN-</i> の形態	77
2.1.8.2	接頭辞 <i>paN-</i> の機能	79

2.1.9	名詞を派生する接頭辞 <i>sa-</i>	82
2.1.10	副詞・接続詞を派生する接辞 <i>sa-</i>	82
2.2	特に強い強勢の付加による派生	83
2.3	語基と派生語の語類の対応と統語的対応	83
2.4	重複	88
2.4.1	重複形の名詞	88
2.4.2	重複形の動詞	91
2.4.3	重複形の副詞	92
2.5	複合	93
2.5.1	名詞と修飾成分が形成する複合語	94
2.5.2	指示詞を含む複合語	94
2.5.3	否定詞 <i>nó</i> を含む複合形	94
第5章	文の構造	113
1	文の成分と構成要素	114
1.1	述部	114
1.2	述部以外の成分	114
1.3	文の構成要素の分布	115
2	名詞句	115
2.1	名詞句の主要部	115
2.1.1	人称詞	116
2.1.2	指示詞（名詞相当の機能を持つもの）	118
2.1.3	数量詞	118
2.1.4	名詞節形成詞	119
2.2	人名を表す固有名詞を含む名詞句	119
2.3	名詞句の修飾成分	120
2.3.1	名詞句が修飾成分である場合	120
2.3.2	人称を表す要素が修飾成分である場合	121
2.3.2.1	形	121
2.3.2.2	人称を表す修飾成分が義務的に現れる場合	123
2.3.2.3	修飾成分として複数の候補がある場合	124
2.3.3	指示詞が修飾成分である場合	127
2.3.4	数量詞が修飾成分である場合	128
2.3.5	副詞句が修飾成分である場合	128
2.3.6	前置詞句が修飾成分である場合	128
2.3.7	動詞が修飾成分である場合	130

2.3.8	名詞節が修飾成分である場合	130
2.4	名詞句の並列	130
3	副詞句	130
4	前置詞句	132
5	動詞以外が文の主要部である文	133
5.1	名詞句が述部の主要部である文	133
5.2	副詞句が述部の主要部である文	134
5.3	前置詞句が述部の主要部である文	134
6	動詞句が述部の主要部である文	135
6.1	文の成分	135
6.2	述部の構造	136
6.2.1	述部の構成要素と述部の主要部の結合度	137
6.2.2	動作主体の人称を表す要素	139
6.2.3	アスペクト辞、モダル辞	140
6.2.4	程度の甚だしさを表す連用詞 ( <i>laló'</i> , <i>benar</i> )	142
6.3	補語	142
6.3.1	名詞句補語	141
6.3.2	前置詞句補語	143
6.3.3	補語の現れ方に関する制約	145
6.3.4	補語の形のまとめ	147
6.3.5	述部に先行する補語	147
6.4	自動詞構文と他動詞構文	148
6.5	主語と目的語	149
6.6	例外的な自動詞の構文	150
6.7	動作の影響を受ける事物が二つ想定できる状況を表す文	152
6.8	他動詞を含む述部内に現れうる要素	154
6.8.1	動作の対象を表す1人称人称辞	154
6.8.2	動作の対象を表す要素の抱合	155
6.8.3	もののやりとりの受け手を表す人称辞、人称詞	157
6.8.4	命令や許可、伝達・発話の受け手を表す要素	159
6.8.5	6.8のまとめ	160
7	副詞成分	160
8	名詞節	167
8.1	名詞節形成詞 <i>adè</i> が形成する名詞節	167
8.2	名詞節形成詞 <i>lók</i> が形成する名詞節	171
9	動詞連続	174

10	複数の文の成分に現れる要素（否定詞、叙法辞、限定詞）	176
10.1	否定詞	176
10.2	限定詞	177
10.3	叙法辞	178
第6章	述部の構成要素	181
1	アスペクト・モダル辞	181
1.1	<i>ka</i> 完了	181
1.1.1	主要部のアスペクトに関する特性による意味の違い	181
1.1.2	基準となる時点	184
1.2	<i>ya</i> 先行する状況との結びつき	186
1.3	<i>ma</i> 願望	188
1.4	<i>na</i> ある状況が成立しないことへの願望	189
2	否定詞	190
2.1	否定詞 <i>nó</i>	190
2.1.1	<i>nó</i> が単独で用いられる場合	190
2.1.2	<i>nongka</i> （否定詞 <i>nó</i> + アスペクト辞 <i>ka</i> ）	194
2.1.3	<i>nó.soka</i> （否定詞 <i>nó</i> + アスペクト辞 <i>ka</i> + 叙法辞 <i>si</i> ）	196
2.1.4	<i>nó.si</i> （否定詞 <i>nó</i> + 叙法辞 <i>si</i> ）の機能	199
2.1.5	<i>nó.po</i> と <i>nó.poka</i> （未然）	200
2.1.6	<i>nó.mo</i> と <i>nó.mongka</i> 「もう～しない」	202
2.2	否定詞 <i>siong'</i>	205
2.3	「否定」についてのまとめ	208
第7章	叙法辞	209
1	叙法辞の概略	209
2	<i>ké'</i> （不確定）	210
2.1	<i>ké'</i> の表す意味	210
2.2	<i>ké'</i> の現れる統語的位置	211
3	<i>mo</i> （起動・妥当）	214
3.1	<i>mo</i> の表す意味	215
3.1.1	<i>mo</i> のアスペクトにかかわる機能	215
3.1.2	<i>mo</i> のモダルに関わる機能	218
3.2	<i>mo</i> の現れる統語的位置	222
4	<i>po</i> （必要な条件）	225
4.1	<i>po</i> の表す意味	225

4.2 <i>po</i> の現れる統語的位置	228
5 <i>ké, mo, po</i> の文中での位置と談話の焦点	231
6 <i>si</i> (対比)	235
6.1 <i>si</i> の表す意味	236
6.1.1 四つの用法の概略	236
6.1.2 <i>si</i> に内在する意味	239
6.2 <i>si</i> と共起しやすい要素	241
6.3 <i>si</i> の現れる統語的位置	243
6.4 <i>si</i> の統語的位置と文の意味の対応	244
7 叙法辞の機能のまとめ	246
第8章 複文	247
1 複文の分類	247
2 名詞節が文の成分または文の構成要素の成分である場合	248
2.1 名詞節が前置詞句を構成する場合	248
2.2 名詞節が補語を形成する場合	249
2.3 名詞節が文の述部である場合	253
2.4 名詞節が名詞句内の修飾成分として機能する場合	254
3 文が名詞節化されず直接名詞句内の修飾成分となる場合	257
4 従属文1 (完全な文として現れるもの)	260
4.1 従属文が主文の主語に相当する場合	261
4.2 従属文が主文の目的語に相当する場合	262
4.3 発話・伝達を表す自動詞と共起する従属文	263
4.4 4のまとめ	264
5 従属文2 (完全な文としては現れないもの)	266
5.1 主文の主語と従属文の主語が同一指示である場合	267
5.2 主文の目的語と従属文の主語 / 目的語が同一指示である場合	277
5.3 主文の動作の受け手を表す要素 = 従属文の主語である場合	281
5.4 第5節のまとめ	283
6 従属文3 (接続詞を伴うもの)	284
第9章 指示詞	293
1 指示詞の概略	293
2 近隣の言語の指示詞と先行研究における記述	294
3 指示詞の形態論的、統語的機能	295
3.1 指示詞が単独で用いられる場合	295

3.2 指示詞が形成する複合語	298
4 指示詞の用法（意味）	299
4.1 場面指示における用法	299
4.2 ときを表す用法	300
4.3 文脈指示的用法	301
4.3.1 TAの文脈指示的用法	302
4.3.2 NANの文脈指示的用法	302
4.3.3 MÉの文脈指示的用法	305
4.4 TAの物語における用法	305
4.5 個々の指示詞の機能	307
4.5.1 TA「基準点からの近接」	308
4.5.2 NAN「定」	309
5 まとめ	310
第10章 総括	311
補遺 スンバワ語とマレー語の他動詞構文の比較	313
参考文献	321
索引	323

## はじめに

本研究はインドネシア、スンバワ島で話されている言語、スンバワ語の文法を扱う。筆者は1996年から2004年にかけて、のべ9か月間スンバワ島で現地調査を行った。本研究の内容はすべてこの現地調査に基づくものである。

本研究ではスンバワ語文法の全体像を明らかにすることを試みる。本研究の構成は以下のとおりである。

第1章ではスンバワ語をとりまく状況を明らかにするとともに、スンバワ語に関する先行研究、本研究の基盤である調査について述べた。

第2章、第3章では以降の章の導入としてそれぞれ音韻の概略、文法の概略を示す。

第4章では形態論を、第5章では文の構造を扱う。第6章では述部の構成要素であるアスペクト・モダル辞および否定詞の機能を扱う。第7章では叙法辞の機能を扱う。第8章では複文の構造を扱い、第9章で指示詞の意味、機能を扱う。最後に第10章で総括を行い、さらにマレー語との比較を補遺として付した。

研究の基盤となったデータとして、巻末にスンバワ語の語彙集を付した。また、『スンバワ語テキスト』を参考論文として付した。

## 謝辞

本研究を遂行するにあたっては、たくさんの方々のご援助、ご協力を得た。

1996年から1998年にかけての現地調査に関しては三菱信託山室記念奨学財団の助成金を受けた。同財団に深く感謝申し上げる。また、2000年、2001年の調査は文部科学省科学研究費補助金、奨励研究(A)「インドネシア・スンバワ語の現地調査および記述文法、テキスト集作成」(代表者：塩原朝子)の一環として行った。

スンバワでの調査においては、たくさんの方々のお世話になった。特に常に調査に同行くださったDedy Mulyadiさん(通称Edot)およびMaskendiさん、スンバワ・ブサルで宿としたタンボラホテルのスタッフの方々(特にImbik氏)、ウンパンで宿としたホテルパラカマル(双子ハウス)のご家族(Yeni Setiawanさんとご両親)に心から御礼申し上げます。また、物語や会話の収集にご協力いただいたの方々(Agang Patawari氏、故Siti Hawa氏、Herman氏、Drs. Ibrahim、故Abdul Azis氏)にも心から御礼申し上げます。

本稿の執筆にあたっては、たくさんの方々のご指導、ご助言をいただいた。

指導教官である湯川恭敏先生(元東京大学大学院教授、現熊本大学大学院教授)には、本稿の全体について懇切丁寧にご指導いただいた。また、上野善道東京大学大学院教授には、本稿の草稿を読んでいただき、貴重なご助言をいただいた。心から御礼を申し上げます。

また、東京大学文学部・人文社会系研究科、言語学科の先生方、熊本裕教授、林徹教授、および東京大学大学院人文社会系研究科 言語動態学講座の角田太作教授には本稿の元となる研究をお読みいただき、ご指導、ご助言をいただいた。心から御礼を申し上げます。

本稿の執筆に当たり、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究プロジェクト「文法記述の方法の研究」において2002年から2004年にわたり定期的に報告を行った。特に第9章の内容は研究会での報告および議論が元になっている。貴重な助言をくださった阿部優子、江畑冬生、蝦名大助、加藤昌彦、笹原健、笹間史子、月田尚美、中山俊秀の各氏に感謝の意を表す。

また、本稿のうち「人称を表す要素」についての記述は、2004年11月16日に東京大学言語学研究室有生性研究会において行った報告が元になっている。貴重な助言をくださった林徹教授、および児島康宏、千田俊太郎、江畑冬生、蝦名大助、笹原健、梅谷博之の諸氏に感謝の意を表す。

また、本稿の執筆に際して様々な形でサポートをいただいた以下の方々にもお礼を申し上げたい。

まず、筆者が所属する東京外国語大学、アジア・アフリカ言語文化研究所所員、および旧所員の方々には、執筆中さまざまなサポートをいただいた。心から御礼申し上げます。

また、筆者は2004年11月から東京大学言語学大学院生有志による読書会に参加し、そ

ここで多くの知見を得た。世話人である児島康宏氏をはじめ、メンバーの方々に深く御礼を申し上げます。

また、東京外国語大学、アジア・アフリカ言語文化研究所、塩原研究室の元スタッフである佐々木美佳さん、現スタッフである岩田剛さんには何かとお世話になった。御礼を申し上げます。

また、東京外国語大学、アジア・アフリカ言語文化研究所、情報資源利用研究センター茶話会のメンバー、笠井洋子さん、阿部優子さん、新井和広さん、植村健太郎さん、君島結さん、児玉茂昭さん、坂本圭子さん、菅原純さん、千葉淑子さんにもたいへんお世話になった。心からのお礼を申し上げます。

最後に、母 塩原冽子、父 故塩原朝樹、配偶者 射場久善に感謝の意を表す。

## 略号一覧

1, 2, 3	人称（それぞれ 1 人称、2 人称、3 人称）
AFFIX	人称辞
APPL (APPLicative)	アプリカティブ
COND (CONDition)	条件（叙法辞 <i>po</i> に付す）
CONS (CONSequence)	結果（モダル辞 <i>ya</i> に付す）
DESIRE	願望
DESIRE.NEG	否定の願望
EXCL.	（ 1 人称複数 の ） 排他形
GEN.	（ 1 人称単数普通体 の ） 属格
HIGH	（ 1 人称、 2 人称単数 の ） 丁寧体
INCL.	（ 1 人称複数 の ） 包括形
INTERR (INTERRogative)	疑問（叙法辞 <i>ké'</i> に付す）
LOW	（ 1 人称、 2 人称単数 の ） 普通体
MM (Mood Marker)	叙法辞（四つの叙法辞のうち <i>mo</i> （妥当）または <i>si</i> （対比）に付す）
NEG	否定
NOBLE	（ 1 人称、 2 人称単数 の ） 話し相手が身分の高い貴族である場合に用いられる形
NOM	名詞化詞（ <i>adè</i> と <i>lók</i> ）
PERF (PERFective)	完了
PL	複数
SG	単数

## 地図の一覧と表の一覧

### 地図の一覧

地図1-1 スンバワ島の位置 1	1
地図1-2 スンバワ島の位置 2	2
地図1-3 近隣の言語とスンバワ語の方言の分布	3

### 表の一覧

表1-1 調査協力者とデータとして用いたテキストの一覧	8
表2-1 子音	9
表2-2 母音	12
表4-1 指示詞が形成する複合語	94
表4-2 否定詞 <i>nó</i> を含む複合形	95
表4-3 否定詞 <i>nó</i> と自動詞 <i>ada'</i> 「～がある、いる」を含む複合形	95
表4-4 他動詞に接頭辞 <i>sa-</i> が付接する場合	97
表4-5 他動詞に鼻音接頭辞 <i>N-</i> または、接頭辞 <i>bar-</i> が付接する場合	101
表4-6 他動詞語根に接頭辞 <i>paN-</i> が付接する場合	106
表5-1 人称詞	116
表5-2 名詞句内の修飾成分として現れる人称詞 / 人称辞	122
表5-3 述部内で動作主体の人称を表す要素の形	139
表5-4 補語の意味と形の関係	147
表5-5 述部内でもののやり取りの受け手の人称を表す要素の形	157
表9-1 指示詞が形成する複合語（表4-1の再掲）	298
表9-2 指示詞の場面指示における指示範囲	299
表9-3 指示詞の場面指示における指示範囲（表9-3の再掲）	309